



校正
大学

歳事記

歳時故実

迪翁道允撰
寛文四年刊



光日

春之衆の始め月れ始るるねと一人より下万人
よとて元日の事あるなりされも上より
乃て後してそなく侍の言程奉をほりり天下を
祀さめ給しよりけしこまなれりあり侍るなり
よとて是よりけし海よりとみふり杜氏通典は侍
の言程十月は奉を云しそ後七年めは長樂宮
を修り群長は元日奉を礼式をけしめ
也いふなり

杜氏通典云漢高祖十月定奉遂為歲首
七年長樂宮成制群臣朝賀儀武帝改用

其正建寅之朔則元日之慶始自高祖

齒固めといふ事ハ其の初にしてハ膠固の義を以て

元日は膠牙錫とてのこり錫を食ふなり也

てやうに梁を食ふもは是風なり又元日は

三朝ともいふなり

荆楚歳時記元日食膠牙錫取膠固之義

五雜俎云正月一日謂之三朝師古漢書

注云歳之朝月之朝日之朝故謂之三朝

朝之義猶且也

人の門戸は松をさるるの如くは松を採りて

王を高貴帝といひて云云遊戯一徳星は探頭

是と云刑星や云つては漢書に云りて名をあらた

めて牛頭と云ふと号して南と北乃側は廣遠國あり

圓を巨丹といふ云母不仁なり云云は丹と云

圓を獲む其は今ハ筆筆年ハ丹暮駿

の事と云ふと云云は丹暮駿の火炉あり元日ハ赤白の

後ハ餅ハ巨丹ハ骨肉ハ赤一ありの也後の人其

をみてを不仁と云ふと云云ハ丹暮駿の事なり

けりハ松竹ハ丹暮駿の事なり

なすハ松竹ハ丹暮駿の事なり

錦練万花谷云董勛答問歳首祝折松枝

男七ツ女二ツ以テ為藥飲

屠蘇

屠蘇といふ薬を典義歌天子へてまづつるありけり
屠蘇やといふ事いひて一りありていふ人あり
の中にもより除くとしに薬一服を合せしり入
井の中よりいひて一りありていふ人あり
とのじを屠蘇やといひていふ人あり
疫をやといひていふ人あり
必本朝といふ人あり
一りありていふ人あり
女れいひていふ人あり

そのり

白眉故事云、廣韻昔人有居草庵之中、每
歲除夕、遺藥一帖、令囊盛浸井中、至元日
取水置酒樽、名屠蘇酒、合家飲之、不病瘟
疫
或問董錫屠蘇必自、幼先飲何也、曰、少者
得歲、故先老者失歲、故後

若菜

正月七日、七種若菜を食す、此年中、若菜を
食す、病ありて、其人多病あり、と云、ゆゑ、
今の人、皆若菜を食す、七種の若菜と云、てあり、その

なりて食ひゆるあり

荆楚歳時記云正月七日俗以七種菜作
羹食之入無万病

人日

元日を鶏日二日を猪日三日を羊日四日を狗日五日
を牛日六日を馬日七日を人日八日を穀日九日を
餅日十日を石名あり漢文と東方朔の古書より出
て又俗説ありさゆより晋の代に前めは此名を
さゆとありあまの唐の李肇の唐書に七日最
長と傳ふるあり此名は人を方相と云ふある
と云ふ是辰なりて後世に人の此日を

後一あるもねがうといふ心なるなり

五雜俎云歳後八日一雞二猪三羊四狗
五牛六馬七人八穀此出東方朔占書然
亦俗説晋以前不甚言也

子日遊

子日遊の事その日遊の事その日遊の事
陰陽の神氣を以てはが惱むのうし此遊の
ありなりなりなりなりなりなりなりなりなり
松をひきける也されもと古よりの変りて
朱雀院の比よりそけいゆあり

錦繡万花谷云正月七日登岳遠望四方

とるひりしきりけりしとるは然入ありし
ありし河とふはなありてあるは酒宴はあけあり
し時あり人あは餅と作りて餅とよそまうりなれ
し王も味淡ちめてみありしとて此餅あつる他
かりとの餅ひきとあは麻沸ちりてちよ子宜田は
つき平まやりのふけ平まらり周のせうとい盛は
て天下をさやうよむるありん氏をよそ解ふはあ
人おつて三月さふの餅を作りて餅具しと
てまうりしとて又酒は桃花をひきしとのむる
此酒は桃花をひきしとてなほのめし百病
除き顔色さうはるしとすしとあはのむはひ

ことなげ日桃花をのむはら

錦繡万花谷云周幽王淫乱群臣悲然
時設河上曲水宴或人作草餅負幽王王
嘗其味為羨也王云此餅珍物也可獻宗
廟周世大治遂致太平後人相傳作草餅
三月三日進于祖灵草餅之興從此始
本草云三月三日酒浸桃花飲之除百病
益顔色

上巳

此日をよそことつる事淨の代はげ日とのむる
日成りてあはらうよそとてはひりしに魏晉の

代よりけしめてこの日はあまなれなることと
いふるあり物氣は月日おつてと備われば
とつてよきとはいふなり又西京雜記の二月
あはし乃辰をひくはひまつりし月日
のこの日とあるあるとのせは辰を引て三日
をこの日のといふつるなり

五雜俎云三月三日為上巳此皆魏晉必
後相浴漢猶用巳不以三日也
五雜俎云周公謹癸辛雜志謂上也當作
上巳謂古人用日例以十干恐上有其巳
日不知西京雜記正月以上辰三月以上

巳其文甚分明非誤也但巳字原訓作止
謂陽氣之止此也則巳恐即是巳字似不
可以支為于耳

曲水宴

けりあの前りにゆき遊ぼうと人物を佐の物と孫
しけり本物そと雅由名守の湯字もられ
るしみよりなるての物いふ密あつあの前りふ
かるんおて意はあつて我輩をすさむは物を佐
つてその意をとりて飲けるあり物と花すれ
といふよきわくはあつて其もて平人さへは
あつてもけりといふあり

又の後より後漢の章帝時平原に徐肇と云
り月の初は女子三人をうごころ一日乃は女
とりの糸より一村のりのものをけしおひおろ
さしとあるよゆき石祥の氣をけしひ流るふ
よりてをうごころ湯を飲ぎより水れおひた
らりけりとあれあり

韓詩外傳云三月桃花之時鄭國之俗三
月上巳於溱洧西水之上執蘭招魂祓除
不祥也

荆楚歲時記云荆楚四民三月為流曲
水之飲取黍麴菜汁和蜜為末厭時氣

續齊諧記云晉武帝問尚書郎摯虞曰一
日曲水其義何指答曰後漢章帝時平原
徐肇以日初生三女三日俱死一村以為
怪乃相携水邊濯洗因流水以盥觴曲水
起是帝曰若此所說便非佳事東晉曰摯
虞不足以知臣請說其始昔成王上洛邑
因流水以泛酒故詩羽觴隨波又秦昭王
置酒河曲有金人自泉而出捧水心叙曰
令君制有西婁因立為曲水二漢相沿皆
有盛集

後漢書註劉熙曰一說云後漢有郭虞者

三月上巳産二女二日中並不育俗以為
大忌至此月日諱止家皆於東流水上為
祈禳自絮灌謂之楔祠引流行觴遂成曲
水

端午

五月あをのこ端午をいはしきさの成りその法
ゆるもつ日を志し端午をいはしある古人も端午乃字
やみのまよとしそのは海一見いころり端午を始や
陰年といつちまをる成初をいしつちあをのこ
陳留の術業ハのい志そく一をれを宗に
八月あををいし秋の節と志あひを張九齡

大初曆をそそつち唐は八月端午をいし
ととねんをそそり又宋陽の志は月ハ推計
端午はあをそそねをいんをねいとそそ月
あををいし端午をいはし人事あり

容齊隨筆云唐玄宗以八月五日為千秋
節張九齡上大行曆序云謹以開元十六
年八月端午獻之又宋璟表云月惟仲秋
日在端午然則凡月之五日皆可稱端午

折の高蒲

此日之俗は葦葉を門戸に懸てあやめをばぬ
久く飲交を以て入のころを能り門戸のよをけ

不とりよ人ありし年八月は浮橋ありたるを
 其を束すり即ちうねふよわけ人ありし其の
 れりく程をゆらいたのりて流れゆきはるあり
 してその中をわねの跡婦あり又一丈夫のたの
 法のがとりよ牛とひきあとのまをさくさく
 やしくあひてそいりまのあやんとといわれ
 といひしゆのとききくいつく君向りて蜀の
 了嚴平君よとてそは蜀のまゆに嚴平君よと
 ありたる嚴平君を言ていつくそ年日月家
 牛とわすしとありよきげ人ちあよりし時
 一といふその仙術をばて中日は信ていつく



お娘女はを海に事あり申向いしとありし
 といひしゆの娘女をいつく事牛のまをさく
 これをいつく娘女事牛のまをさくおちり
 傳々ありしとわね五穀題又山陽の聖祐
 記をわね事女のまをさくはいつく事
 特物志系様の浪流よりてはあよ千載の
 子ひいつくそまのまありとありしと
 早治業のまをさくしてはあよは流辱の
 ものありしとわねの俗人をと強新し
 てありしとわねの俗人をと強新し

齊諧記云、天河東有織女乃天帝之子機

後勞役容不服理天帝憐其獨居將嫁與河西牽牛之夫齊嫁後竟廢女工天帝怒責令歸河東惟一年一會淮南子云烏鵲填河成橋渡織女博物志云有人居海上者見年々八月有浮槎去來不失期多齊糧乘槎而去至一處遙見宮中有織婦見一丈夫牽牛渚次飲之此人問是何處答曰君還至蜀問嚴平君至蜀問平君答曰其年月日容星犯牽牛正是其人到天河時也五雜俎云牛女之夏始於齊諧成武下之

妄言成於博物志乘槎之浪說千載之下婦人女子傳為口實文人墨士乃習為常語使天下列宿橫被汚穢不亦可恠之甚耶鑑湖夜泛記云下土無知愚民好誕妄傳秋夕之期指作牽牛之配致令清潔之操受此汚辱名

乞巧真

七夕乞巧のつりとりする事ハ夏文類聚に云ふ多を乞ふ所ハ瓜菜也瓜を割て庭に懸る玉簪下のごくみぎの糸を乞ひくゝるをいひのふ三年の月

必とけしありるのまゝの討ち申すは神とてりしか
菓をさるる牛女の二星とほつる嬪妃ののけし
みよのあはれおそく月よじつてききとてす
りのけをたつて酒あつておほいふとてきき
をたつとありあつる又まゝおほいとて七月七
日のまゝたつて海客のありし時女のとて
うら葉ほ解をさるるおほいとてす
えんをさるるおほいとてす
らてうら葉の中に入つておほいとてす
とておほいとてす
天寶遺史云宮中以錦結成懸殿高百尺

上可以テ勝ラ數十人陳以ハ瓜果酒多設坐貝
以テ祀ル牛女二星嬪妃各執九孔針五色線
向テ月穿之透者為得巧之候動清高之曲
宴樂達旦士民之家皆効之
錦練万花谷云郭翰少有清標乘月臥庭
中視空中有入丹之而下乃一少女明艷
絶代曰吾天之織女也上帝賜命遊人間
願之神契乃升堂供枕欲曉辭去後夜復
来翰戲之曰牽牛郎何在那敢独行對曰
陰陽變化開渠何更至七夕忽不来數夜
方至翰問云相見樂乎笑曰天上那比人

織女

けりきり事ねらむとみんといつてきりきり
とけしよりあり年報とみゆるすとの世れ人を
あつきの期日といふとてはらりきりて
ととふ者おぬすぶる事あはれなり

十五夜の月

このつと月を照らすつとつとりのあつてわき
と昔を照らすつとつとりのあつてつとつとり
宗八月十の夜きりて大徳池の月を照らす
ひ獲題と李封と世夜林の中はあつてつとりのあつ
と月を照らすつとつとりのあつてつとつとりのあつ
きりてつとつとりのあつてつとつとりのあつ

をとり解賞の極するあり

守陽

九月九の夜をきりてつとつとりのあつてつとつとりのあつ
よ日もあつてつとつとりのあつてつとつとりのあつ
費長房女中の極景のつとつとりのあつてつとつとりのあつ
あつてつとつとりのあつてつとつとりのあつてつとつとりのあつ
某をきりてつとつとりのあつてつとつとりのあつてつとつとりのあつ
つとつとりのあつてつとつとりのあつてつとつとりのあつ
つとつとりのあつてつとつとりのあつてつとつとりのあつ
つとつとりのあつてつとつとりのあつてつとつとりのあつ
つとつとりのあつてつとつとりのあつてつとつとりのあつ
つとつとりのあつてつとつとりのあつてつとつとりのあつ

月永日 献餅祝之也
万花谷云 十月亥日 食餅除万病

追劔

やわらふおのまはつとけくちをさうらう夜鬼とくふ
物とてふまをのけりけりけりなるまのりまねとま
りて屋まふ古より此をれりむりし額相氏より子
ありけりておのりひねり具後鬼とけり一そいふ
とるを虎とす一そ若ある居守是城園支機鬼と
そ一人のま家匹隅のあふ居く人の不見を恐る
と年のあふくあふはひゆりてくひわす一そを
むる人ふあふと表家内の鬼鬼とくひありて

ゆくりの護国は福徳のほは餅いんをさうらう
ゆる追劔といふや年中の夜鬼とけりふえりり
相成のあふて黄金の向ふ月あをさて然乃皮
さまう一そろと衣はふもすそとて
こり有とあけ依り言二十人は約くそ桃のら
棘のあふく官方を村赤丸の人数をひてお氣
けらあて後漢を礼儀志あらりちをとも赤丸
ふ人数の教あはしほのくもけさるまうりて
ね大豆さうはちり

はゆ

足跡集あふく梅熟く後ふおぬと梅ぬとあふ

未事佛甚謹著在法律遇此三月則禁刑
断屠

寬文甲辰孟冬日

迪齊 道允

涖毫於武江蠅室

